

知の理論 (TOK)

所定課題 課題文見本

知の理論

所定課題 課題文見本

1. 「誰か一人が私たち全員よりも賢くなることはない」(エリック・シュミット)。この主張にどの程度同意するかを、「個人的な知識」と「共有された知識」に言及しながら論じなさい。
2. 「地図は、事物を単純化してこそ有用なものとなる」。この考え方は、知識に対してどの程度あてはまりますか。
3. 「知識の領域」は、過去に行われたことによってどの程度形づくられていますか。2つの「知識の領域」に言及しながら検討しなさい。
4. 「すべての知識は、パターンと変則を認識することに依存している」。この主張にどの程度同意するかを、2つの「知識の領域」に言及しながら検討しなさい。
5. 「知識をもつことにより、特権が与えられる」。この主張はどの程度正確ですか。
6. さまざまな「知るための方法」は、誤った思い込みをどの程度防止しますか。少なくとも1つの「知識の領域」に言及しながら、自身の解答の正当性を論証しなさい。

知の理論

試験官用準備資料：所定課題 課題文見本

はじめに

この資料は、試験担当チームが所定課題を作成した際に、それぞれの課題文に対してどのような意図を込めたかを説明するものです。国際バカロレア資格取得志願者が選択した課題文に解答する際に、どのようなアプローチをとる可能性があるのかが示されています。試験官は、以下のポイントを念頭に置いてください。

1. 小論文（エッセイ）の**採点中**に本資料を解答の中に期待される要素の「チェックリスト」として使用することは、いかなる理由があっても絶対に避けて下さい。本資料はあくまでも採点前の準備のためのものです。
2. 試験官はこの資料を**採点前**に熟読し、所定課題に対する解答がどのように作成される可能性があるかについての認識を広げ、深めることが求められます。
3. この資料で示唆されているアプローチが唯一のアプローチというわけではありません。また、これらが最も優れたアプローチではない場合もあり得ます。
4. この資料はおおむね抽象的な言葉で書かれていますが、これは、それぞれ異なる実際の小論文（エッセイ）を**全般的に**説明するためです。このため、具体的な例は含まれていません。
5. この資料では、**理想的**な解答が示されています。有効な議論を展開するために志願者が注意しなければならない点は数多くあり、ほとんどの志願者は、それらを完ぺきに成し遂げることはないでしょう。
6. この資料の目的は、誤ったアプローチや志願者が陥りがちな間違いについて説明することではありません。

つまり、ここに書かれている内容は、試験官の評価に役立てるための枠組みにすぎません。したがって、試験官はその他の有効なアプローチに対してもオープンな姿勢を保つことが求められます。ただし、**志願者が課題文を論じるにあたって「知識に関する問い」を適切かつ説得力のある方法で分析したかどうか**を、すべてのケースにおいて検討するようにしてください。

試験官は、志願者が以下を達成したかどうかを検討します。

- a. 課題文を理解している。
- b. 課題文に明示的もしくは暗示的に含まれている「知識に関する問い」を理解している。または、課題文から自然と生じる「知識に関する問い」に課題文を結びつけている。
- c. 課題文のトピックと適切な「知識に関する問い」について、説得力のある幅広い視点から議論を展開し、確かな裏づけを示している。

1. 「誰か一人が私たち全員よりも賢くなることはない」(エリック・シュミット)。この主張にどの程度同意するかを、「個人的な知識」と「共有された知識」に言及しながら論じなさい。

この課題文のポイント

この課題文では、「個人が知り得る知識」と「『知る人』(knower)の集団が知り得る知識」という観点から知識を検討し、この2つを比較することが求められます。「知るための方法」と「知識の領域」については言及や指定がありませんが、志願者が解答を構成する上でこれらに言及することが期待されています。「個人的な知識」と「共有された知識」の対比は明確に説明されなければなりません。また、分析を行うにあたって、志願者は「賢い」とは何を意味するのかを定義する必要があります。なお、エリック・シュミット氏、および同氏がどのような文脈においてこの主張を述べたのかについて志願者がリサーチすることは求められません。

知識に関する問い

この課題文に解答する過程で志願者が特定する可能性のある「知識に関する問い」には、以下のようなものがあります。

- どのような状況下において、「知る人」(knower)の集団は、個人の「知る人」(knower)よりも信頼性の高い(または低い)知識に到達するのか。
- 「賢い」と見なされる「知る人」(knower)は、どのような性質を有しているか。
- 専門化することにより、知識の構築や習得がどの程度制約または促進されるのか。
- 「個人的な知識」と「共有された知識」の区別は、どこまで明確か。
- 「個人的な知識」とは、単純に「共有された知識」の構成要素にすぎないのか。
- 「個人的な知識」と「共有された知識」を構築する過程で、「知るための方法」はどのような役割を果たすか。
- 異なる「知識の領域」において、「個人的な知識」と「共有された知識」はどのような相対的重要性をもっているか。
- 個人が集団よりも多くを知ることのできる状況は存在するか。

この課題文へのアプローチについての論評

この課題文の主張を最も単純に解釈すると、「一人の個人が、その人の帰属している集団よりも賢いということとはあり得ない」ということとなります。解答する際には、答案の初めの段階で、この文脈における「賢い」とは何を意味するかを考察するのが賢明でしょう。例えば、「賢い」とは、より知識があること、すなわち、より多くの事実を知っている、またはより幅広いスキルを使いこなすことができることを意味するのかもしれません。

「賢さ」は、多くの場合において「知性」に結びつけられる傾向があります。志願者が小論文(エッセイ)においてこの2つを結びつける場合には、知性を、情報を処理して知識に変える能力、「知ること」に関連する問題への創造的な解決法を見つける能力、さらには知識を適切な方法で応用する能力としてとらえるのが最も有効かもしれません。

「賢さ」という概念を何らかの形で知識の習得、所有、応用に関連づけると、集団の「賢さ」のレベルは、さまざまなプロセスの結果として生じたものだととらえることができます。それは、集団を構成する個人が有している知識の単純な合計であることもあれば、何がしかの相乗効果を通して単純な合計以上のものにな

ることもあり得ます。集団が使用することのできる人的資源の豊かさゆえに、集団は個人よりも容易に知識を習得、保管、応用することができるのかもしれませんが。

この議論を展開するにあたっては、「個人的な知識」と「共有された知識」を区別する必要があります。さまざまな「知識の領域」における「共有された知識」の量はきわめて膨大です。そのため、「共有された知識」は、それを使用したいと思う人がアクセスできるように保管されなければなりません。「賢さ」が、個人や集団の保有するこの種の知識の量を指すのであれば、誰か一人が全員よりも賢くなることはないという主張は否定しがたいように思えます。なぜなら、「個人的な知識」は、この種の「共有された知識」の小さな一構成要素にすぎないととらえることができるからです。さらに、時間をかけて知識が拡大し、また知識生成の方法が普及した結果として、ほぼすべての分野で徹底した専門化のプロセスが進んだことから、「個人的な知識」は（「共有された知識」に比べて）かつてないほど限定的なものになっていると論じることがもできます。この結果、私たちがもっている「共有された知識」の全体像をとらえるのは今までになく困難になっており、「個人が全員よりも賢くなる」可能性はかつてないほど低くなっています。一方、特定分野の学識者集団をひとつの「個」と見れば、それにこの現象をあてはめることもできます。学識者の集団は、今まで以上に特定専門分野の境界線に縛られるようになってきています。ここに視点を移すことで、「全員」とは誰か、という問いかけが始まります。

「知識の領域」に言及する志願者は、その領域の知識に関与する集団、例えばその知識を生成する集団と、その知識を評価または消費する集団の間での関係を探るかもしれません。例えば芸術家は、芸術評論家とは区別され、芸術の鑑賞者とも区別される可能性があります。そしてこれらの集団によるものの見方は、その集団に帰属する個人のものの方よりも尊重される可能性があります。自然科学においては、知識の生成と評価は同じ研究者集団によって実践される傾向があり、その知識の使用面をより重視するのが科学技術者です。また、科学界においては、研究成果に対して懐疑的なマインドセットをもつことが求められ、これは個人的なものの方を奨励しているのととらえることもできます。しかし、科学界の専門家集団は、明らかに歴史や芸術の世界の専門家集団よりも結びつきが強く、高い同質性を有しているのも事実です。

また、少し違ったアプローチをとり、「個人的な知識」には、自分についての知識や簡単には共有できない個人的なスキルが含まれると論じることがもできます。そうであれば、こうした知識に集団はアクセスすることができないため、この課題文の主張には論争の余地があるようにも思えます。「知るための方法」のなかには、これと同様の性質をもつものがあるかもしれません。例えば直観や想像は、集団よりもむしろ個人にあてはまる「賢さ」の側面である可能性があります。これはつまり、例えば個人の数学者や芸術家が、集団からの強固な支持を必要としない洞察をもち得ることを意味します。

さらに、原理上は共有できるけれども、その所有者が集団とは共有しないことを選んだ知識もあるかもしれません。そうした決定には経済的もしくは理念的な理由があり、これが、集団が常に個人よりも賢いという考え方を覆す可能性があります。

個人と集団のどちらが知識をより効果的に習得できるかという問いへの答えは、集団に帰属する者同士の間によって異なる可能性もあります。例えば、集団に帰属する個人が独自に判断を下すことを奨励されている場合には、そうした判断の「平均」が多くの場合において個々人の判断よりも正確なものとなり、これは「集団の知恵」と呼ばれます。一方で、集団に帰属する個人の間で継続的なコミュニケーションが行われた結果「分極化」と呼ばれるプロセスが生じ、共有された判断が、ほとんどの個人が独自の判断を強いられた場合に下す判断よりも真実から遠いところへ逸れることがあります。これは、「集団思考」とも呼ばれます。このような状況は、専門知識と自信を兼ね備えた高名な個人が登場して多数派の見方を覆すことにより、解決されるかもしれません。志願者は、「集団の知恵」と「集団思考」がさまざまな領域の知識の生成にどの程度影響するかを評価しようと試みるかもしれません。例えば、科学の分野においては、出版された研究に対して個人が独自に意見を形成することが規範として奨励されていますが、科学者集団がある思い込みをして他の可能性を十分に考慮しない対話を行った結果、方向性を誤るといふ事例が存在しています。

2. 「地図は、事物を単純化してこそ有用なものとなる」。この考え方は、知識に対してどの程度あてはまりますか。

この課題文のポイント

比喩を使用した課題文では、キーワードを注意深く読み解くことが求められます。ここでは、「知識」という文脈にあてはめる際に、「地図」という概念をどのように理解すべきかを明確にすることが重要です。この課題文には、「地図」、「単純化」、「知識」、「有用性」という4つの主な概念が含まれており、これらは互いに結びつけられなければなりません。質の高い小論文（エッセイ）ならば、何らかの方法で地図の単純さと有用性を関連づけるか、あるいは課題文の主張を否定して、単純さ（あるいは複雑さ）と有用性とは何ら関係がないことを示すでしょう。この課題文には「知識の領域」や「知るための方法」についての指定はありませんが、志願者は、このいずれかまたは両方における地図のような特性に着目して課題文に解答しようとするかもしれません。さらに、課題文を分析する際に、「個人的な知識」と「共有された知識」の概念を使用する可能性もあります。

知識に関する問い

この課題文に解答する過程で志願者が特定する可能性のある「知識に関する問い」には、以下のようなものがあります。

- 知識はどのような点において、地図になぞらえることができるのか。
- すべての知識が、地図のようなものなのか。
- 「知るための方法」を使うことで、私たちは「個人的な知識」の一部としての地図を構築することができるのか。
- 知識のどのような使用方法において、単純化が必要となるか。また、どのような使用方法が、単純化によって制約を受けるか。
- 地図が必然的に現実を単純化したものであるのならば、地図はどのように私たちに知識をもたらすことができるのか。
- 単純化された地図に基づく理解とは、何を意味する可能性があるか。
- 地図（またはモデル）による予測が不可能であっても、地図（またはモデル）はやはり有用なのか。
- 地図（またはモデル）の単純さと正確さの間には、どのような関係性があるか。

この課題文へのアプローチについての論評

志願者は、この課題文に含蓄された意味（知識とは、具体的な問題を解決するために現実を単純化した地図であるととらえることができる）を明らかにすることから解答を始める可能性があります。このようなアプローチをとるには、例証や正当化、批判的な振り返りを行う必要があります。この文脈において「事物」とは、私たちの周囲の複雑な世界を意味し、また「地図」とは、その世界のなかの特定の側面に関する問題を解決する際に役立つよう作成された知識を比喩的に表現したものといえるでしょう。

「単純化」という言葉は十分に定義するのが難しいと思われませんが、志願者は、地図とはその対象地域をありのままに示そうとするものではないと論じるかもしれません。例えば、一定の特徴を省略したり異なる種類の物の間にある区別を除去したりしている点を挙げ、そして、これは決して悪いことではないと論じるかもしれません。生徒が「単純さ」や「複雑さ」の専門的な定義に深く踏み入ることは期待されていません。

志願者がとることのできるアプローチのひとつが、知識を「個人的な知識」と「共有された知識」に区別することです。このアプローチをとるのであれば、志願者は適切な例を用いることにより、現実を単純化した地図がどのように（例えば「知るための方法」を通して）「個人的な知識」として作成されるのか、なおかつ（おそらくは知識の枠組みのさまざまな側面に言及することで）どのように「知識の領域」の「共有された知識」として作成されるのかを示すことができるでしょう。

「知るための方法」のなかでは、おそらく知覚、言語、記憶が、地図のような特性をもつもののように見えることでしょう。知覚と記憶に伴う「常識」という概念は、これらの「知るための方法」がそれぞれ現在と過去を忠実に示したものであることを示唆しています。しかし、能力のある志願者は、さまざまな影響があるためにこの「忠実」という概念が浅はかであり確証できないものであると論じるでしょう。そして、これらの「知るための方法という地図」を機能させるには、絞り込みのプロセスが必要であることに言及するかもしれません。また、言語の目的（複雑な世界をわかりやすく分類することを含む）は、表現の一部として恣意的な用語を使用する「地図」を構築することによって達成されます。この特性は、「地図」の力をより大きなものにする可能性があります。

「共有された知識」については、対照的な方法論やテーマを有する「知識の領域」を取り上げるのが有効かもしれません。「知識の領域」のなかには、その「守備範囲」が比較的容易に特定できるものがあります。例えば、自然科学の物理的宇宙や、歴史のなかの人類の記録された過去などが、これに該当します。しかし、この特定が必ずしも容易ではない場合もあります。芸術や数学、宗教的知識体系の「守備範囲」を特定するのは、より困難かもしれません。

自然科学やヒューマンサイエンス（人間科学）は、やや異なる目的をもつ「地図」の作成ととらえることができるため、単純化の利点に関して異なる解答をもたらす可能性があります。経済学のモデルは、予測するというよりは理解することを目的として、複雑に変動する現実をきわめて単純化したものです。一方、多くの科学的法則や方程式の単純さは、人間が介入したからではなく自然に存在するものだと論じることもできます。これらの領域は、対立する視点から考察することができます。経済学の法則は全体として物理学の法則と同じぐらい単純である一方で、自然科学の応用のなかにはきわめて複雑な地図を有している分野もあります。その有用性が地図の単純さに根ざしているかどうかは、その地図がどのような問題を解決しようとしているかに大きく依存するかもしれません。

解答は、芸術、歴史、倫理といった分野に言及することもできます。例えば、物語や音楽の構成理論といった観点から完ぺきな芸術様式の典型的なモデルを考えることにより、真の物語や音楽がもつ複雑さが単純化され、これは私たちが様式の仕組みを理解する際の助けになります。また、倫理という分野における「地図」は、現実世界の複雑な倫理状況を整理するのに役立ちます。そして、歴史を単純化した一般的な説明は、文献に存在する厄介な、時として矛盾すら含む詳細をならしてまとめるのに役立ちます。

一方、志願者が、地図の性質とは程遠いように見える知識の側面や、地図作成に伴う単純化が役立つとは思えない状況に注目する可能性もあります。知識の比喩としては、「地図」よりももっと正確な表現があるかもしれません。また、志願者は、地域あるいは種族固有のもとも備わった知識においては、過剰に理屈をつけることは避けられることもあると論じ、これが地図の喩えにとって何を意味するかを推測することもできるでしょう。

知識の種類、地図の種類、さらにさまざまな使用法や単純化の度合いを、すべて包含して順列のように列挙しようとする志願者もいるかもしれませんが、このようなアプローチは、過度に複雑で、かつ表面的な小論文（エッセイ）につながりかねません。この方法では、志願者が問いを深く突き詰めて説明することは期待できません。求められているのは、十分に幅広い事例を使用して結論を裏づけた小論文（エッセイ）です。究極的に言えば、この問いに対する優れた答案を作成できるかどうかは、単純化の概念をどこまで巧みに用いることができるにかかっています。

3. 「知識の領域」は、過去に行われたことによってどの程度形づくられていますか。2つの「知識の領域」に言及しながら検討しなさい。

この課題文のポイント

この課題文で必要とされるのは、「知識の領域」の過去とは何を意味するかを明確にし、またこの過去が「知識の領域」の現在の形にどの程度影響した可能性があるかを探究することです。志願者は、2つの「知識の領域」を自由に選択して、それらを比較するよう促されています。優れた小論文（エッセイ）は、選択した2つの「知識の領域」にバランスよく言及したものとなるでしょう。

知識に関する問い

この課題文に解答する過程で志願者が特定する可能性のある「知識に関する問い」には、以下のようなものがあります。

- 「知識の領域」の過去とは、正確には何を意味するのか。
- 「知識の領域」の過去は、その現在の形にどのように影響し得るか。これを引き起こすメカニズムは何か。
- 「知識の領域」がその過去によって影響されるとすれば、過去が異なっていたなら現在の形も違ったものになっていた可能性があることを意味するのか。
- 「知識の領域」がその過去によって左右されるのであれば、その「知識の領域」はどの程度、客観的といえるのか。
- 「知識の領域」がその過去によって形成されるとすれば、「知識の領域」とは、世界を表現したものではなく、むしろ人間の社会的活動の反映であることを意味するのか。
- 「知識の領域」の進化において、偶然はどのくらい大きな役割を果たすのか。
- 「知識の領域」がその歴史によって形成されていることを、私たちはどのようにして知るのか。
- 「知識の領域」がその歴史によって形成されている場合、これはその領域の信頼性に関してどのような意味をもつのか。

この課題文へのアプローチについての論評

この課題文の主軸は、「知識の領域」の過去は、その現在の形をある程度左右しているかもしれないという考えです。「知識の領域」の過去と聞いて、志願者は、(過去において) その「知識の領域」に関連づけられた目標や用途、それを表現した概念や言語、使用された方法論、さらには過去のある時点での全般的な発展状況に言及しようとするかもしれません。これらの側面は全体として、過去のどこかの時点で存在した「知識の枠組み」と考えることができます。ただし、志願者が必ずしもこれらの用語を使って論じる必要はありません。この課題文は、2つの「知識の領域」に関してこれらの問題点を考察するよう要求しており、志願者は、対比する目的でその2つを選ぶことができます。

「知識の領域」に関するこれらの(過去の)側面の一部またはすべてから、その現在の状況へとつながる因果関係を引き出せるという考え方は、「知識の領域」の現在の形が現在の状況にのみ依存している可能性と対比させられるかもしれません。これは「歴史の偶然」が「知識の領域」の現在の形に影響した可能性は皆無であることを示唆し、「知識の領域」の現在の形がともかく不可避なものであるという、さらに強い確信へと

つながることもあるでしょう。これは、歴史と無関係に知識をとらえる見方です。この二分法的な見方は、現代の知識の体系が偶然か必然かという論として展開できるかもしれません。

「知識の領域」は、時を超えてある種の継続性を保つ傾向にあるため、その時間軸によっては歴史的な関係性が強く表れたり弱く表れたりします。知識が根本的に変化する時でさえ、「知識の領域」の一部の側面は保持されます。このため志願者は、事例を使用して、そうした場合の側面とは何かを考察すべきでしょう。単に変化を説明するのでは不十分です。志願者は、小論文（エッセイ）全体を通じて、過去の変化が現在の形をつくり出したかどうかを論じなければなりません。

「知識の領域」の過去が現在の形にほとんど影響しなかった可能性を論じる志願者は、数学の分野に目を向ける可能性があります。数学では、対象が人間の歴史には関係なく、ある意味で客観的に「実在」しているとするプラトンの見方があるためです。数学記号は人間が作ったものであり、したがって歴史の力に影響を受ける可能性がありますが、これは根本にある数学の性質そのものに関する問いにかかわることではありません。一方、自然科学のテーマを形成する物理的宇宙と、その宇宙に関して人間が時間をかけて積み上げてきた知識を区別することもできます。このアプローチは、科学的な知識が、特定の発見とその位置づけによって長期的な影響を受けることを示唆します。また、「知識の領域」のテーマの性質は、その領域の発展に対して特定の影響をもたらすことがあります。例えば、自然科学におけるテーマが着目する対象は変わらない一方で、ヒューマンサイエンス（人間科学）では研究対象が変わる可能性があります。

また、芸術分野からも多くの事例を引き出すことができます。芸術分野の伝統や芸術運動の形成は、「慣習と実践を通じて生成されてきた意味」という観点から分析できるかもしれません。同様に、伝統に変化をもたらすような出来事について検討することもできるでしょう。ただし、小論文（エッセイ）では、単に事例を説明するだけでなく、これらの事例が知識の生成にどうつながるのかを論じることが重要です。このアプローチを用いた優れた小論文（エッセイ）においては、芸術をどのように知識の体系として考えることができるかについて、何らかの洞察が盛り込まれていることでしょう。

さらに、志願者は、ある「知識の領域」における発展が、別の「知識の領域」にどのような影響をもたらしたかを探究することもできます（課題文を見るかぎり、このアプローチが除外されているわけではなさそうです）。このアプローチをとるならば、例えば自然科学の発展と、歴史もしくは宗教的知識体系の発展との間に存在する関係を分析することができます。さらに考慮することのできる要因としては、「知識の領域」がどれくらいの過去を有しているかということが挙げられます。例えば、古代からある宗教的知識体系と、比較的新しいヒューマンサイエンス（人間科学）の間には、（ある部分で関心領域が重なっている可能性はあるものの）対照的な点が存在します。

この課題文では、志願者が注意すべき落とし穴もいくつかあります。例えば、志願者によっては、特定の「知識の領域」の進化を、課題文に内在する「知識に関する問い」につなげることなくただ単に詳細に説明するだけに留まってしまうことがあるかもしれません。偶然の発見の事例を説明することは、自然科学の進化において偶然が果たしたかもしれない役割について言及しないかぎり、まったく価値がありません。この際、科学的な方法論の仕組みを議論するだけでなく、「発見されなかったかもしれないこと」によって科学が形成されているという可能性もとり上げる必要があります。もうひとつの落とし穴は、課題文をパラダイムシフトという観点から無批判的に分析することでしょう。生徒は、パラダイムシフトが何を意味するのかを明確に定義したうえで、特定の「知識の領域」の進化を考えるにあたってこれが有用な概念であるという根拠を示すことが求められます。また、その場合は、パラダイムシフトが知識の性質に対して及ぼす影響についても明確に論じる必要があるでしょう。

4. 「すべての知識は、パターンと変則を認識することに依存している」。この主張にどの程度同意するかを、2つの「知識の領域」に言及しながら検討しなさい。

この課題文のポイント

この課題文では、パターンと知識の間のつながり、および変則と知識の間のつながりを検討したうえで、これら（パターンと変則）がどの程度、そしてどのように知識と結びつけられるかを分析することが求められます。鍵となる「パターン」と「変則」という概念はいずれも、知識との関係という観点から同程度に探究する必要があります。「知識の領域」と「知るための方法」については指定がありませんが、この問いは志願者が「知るための方法」と「知識の領域」との間のつながりを確立する機会を与えるものになっています。このつながりを確立することにより、志願者は問いに対するしっかりとした答えを用意することができるでしょう。

知識に関する問い

この課題文に解答する過程で志願者が特定する可能性のある「知識に関する問い」には、以下のようなものがあります。

- パターンや変則が知識の構築に先行するものとなるべき状況とはどのようなものか。
- さまざまな「知識の領域」において、パターンはどのような形式をとるか。
- 「知識の領域」は、変則に対応するためにどのような仕組みを取り入れているか。
- パターンの理解に依存しない知識は存在するか。
- パターンを知識の基礎として受け入れるにあたって、どこまでそのパターンを確証する必要があるか。
- 「知るための方法」は、パターンと変則を認識するうえでどのような役割を果たすか。
- パターンや変則の認識に誤りがあった場合、私たちはどのようにしてそれを知ることができるか。
- パターンは、世界のなかで認識されているのか、それとも世界に対してあてがわれているのか。

この課題文へのアプローチについての論評

志願者は、選択した「知識の領域」におけるパターンの重要性を小論文（エッセイ）の初めの段階において論じることにより、議論を展開しようとするかもしれません。このアプローチをとるのであれば、パターンという概念についての理解、そしてパターンがどの程度知識の基礎として機能しているかについての理解を示す必要があります。すべての「知識の領域」において、知識の構築にはパターンの認識が必要だと主張することもできます。その場合は、パターンがどのように認識されるのかを論じるにあたって、「知るための方法」について考察する必要が生じるでしょう。また、志願者は、一部の「知識の領域」ではパターンを模索することが重要でないと主張するかもしれません。

パターンは一般化を可能にし、これにより私たちは、周囲の世界を理解することができます。つながりや類似性を見出すことなく、ただ単に個別の事例だけを見るということは不可能です。また、つながりや類似性がなければ、「意味のある何かを知っている」と主張することが困難になってしまうかもしれません。さらに、個別の事例を理解するにはパターンが必要です。パターンによって、それらを理解するための文脈がもたらされるためです。

パターンの性質は、「知識の領域」によって異なる可能性があり、志願者は、モデル、理論、法則、原則、解釈などといった異なるカテゴリーに属する事例を探究するかもしれません。このような分析は、これらのパターンが本当に世界の特性として認識されているのか、それとも私たちが収集するデータや情報を整理するための原則として機能しているのか、という問いへの答えを引き出すかもしれません。また、出来事を物語や「語り」(ナラティブ)に構成するといった他の種類のパターンが、この問いの解明に役立つ可能性もあります。

例えば、自然科学におけるパターンとは、自然界で観察される規則性を指すかもしれません。これらの規則性はきわめて一貫性が高いため、自然の摂理と見なされます。また、こうしたパターンは予測の基礎となるため、信頼性が非常に重要になります。ヒューマンサイエンス(人間科学)の分野においても私たちはパターンを見つけようとしますが、この領域の性質ゆえに、一貫性はそれほど高くない可能性があります。この領域では人間の行動のパターンを扱いますが、観察される規則性は幅広いものとなるでしょう。自然科学の説明は、自然界の仕組みを解明することをねらいとしますが、ヒューマンサイエンス(人間科学)の説明は、人間の行動を説明するだけでなく、社会により良い基礎をもたらすこともねらいとしています。また、芸術に目を向けて、芸術におけるパターンの機能は自然科学のパターンの機能とは異なると論じることもできます。芸術のパターンは様式という形態をとり、それが手引きとなることはあれ、その目的は結論に確実性をもたらすことではないからです。さらに、歴史のパターンは、特定の規準に基づく栄枯盛衰の形式をとる可能性があり、おそらくは何らかの循環的な規則性を有しているでしょう。

この課題論文では、知識の構築において変則が果たす役割についても論じる必要があります。パターンの認識は、一般化や確率の帰納的なモデルの裏づけになるかもしれませんが、進歩のための手段としてそれを論破するには、変則や例外を探する必要があります。変則は、「期待どおりにはならない」という証拠を示すものであり、一般に受け入れられている主張や見方に矛盾する、あるいは矛盾するように見える観察結果としてとらえることができるかもしれません。

さらに、パターンを崩すかのように見える発見に対して起こり得るさまざまな反応について探究することもできます。厳密に反証主義の立場をとるのであれば、変則や例外があった場合はそのパターンへの忠誠を絶たなければならないでしょう。一方、変則や例外は、その発見の向こうにまた別のパターンが存在していることを示す予兆と見なされるかもしれません。手順に何らかのエラーがあったとして説明されることもあるでしょう。自然科学とヒューマンサイエンス(人間科学)の分野に携わる人々は、常にこの種の決断を迫られています。実験に取り組む学校の生徒もそのような状況に直面しますが、この場合はほとんどが、実験にエラーがあったと帰結するのが最も理にかなった説明です。

志願者は、私たちが描く世界は、経験からパターンを導き出そうとする深いレベルの規範に依存しており、それと同時に、このパターンに対して変則や例外が見つかった場合にどう対処するか意思決定にも依存していると結論づけるかもしれません。知識は固定的なものではなく、したがって私たちは絶対的な確証を有しているわけではありません。しかし、パターンと変則がどこまで連携して作用するかという問いは、私たちが知識を習得する過程を解明するためのヒントになるかもしれません。

5. 「知識をもつことにより、特権が与えられる」。この主張はどの程度正確ですか。

この課題文のポイント

この課題文では、「知識の所有」と「特権の集積」の間に因果関係があるかどうかを検討することが求められます。「知るための方法」と「知識の領域」に関しては指定がありません。したがって、志願者は「知るための方法」もしくは「知識の領域」のいずれか、または両方に自由に言及しながら解答することができます。志願者は、特権という概念が何を意味するかを読み解かなければなりません。優れた解答においては、この課題文の主張に賛同する根拠、あるいは異議を唱える根拠が考察されることでしょう。特権という概念は、この言葉がどこでどのように使用されるかによって異なる解釈を生む可能性があります。

知識に関する問い

この課題文に解答する過程で志願者が特定する可能性のある「知識に関する問い」には、以下のようなものがあります。

- さまざまな形の特権は、異なる「知識の領域」や「知るための方法」によってどの程度もたらされるか。
- 特権をもつことは良いことか、それとも良くないことか。誰に対してそれがいえるか。
- 知識の習得ではなく知識の応用が特権をもたらすというのは、どの程度真実か。
- 知識をもつことが特権をもたらすのであれば、「知識の領域」としての倫理学は特権の性質を決定するうえでどのような役割を果たすか。
- 知識をもつことが特権をもたらすのであれば、これは、「知識は力である」という考え方にどのように関係するか。
- 「知る人」(knower) に与えられる特権は、私たちがさまざまな「知識の領域」で得る知識の性質を、どの程度変化させるか。
- 「知る人」(knower) に与えられる特権は、その知識に対するその人の姿勢にどの程度影響するか。
- 知識をもつことで得られる特権は、時間の経過とともにどのように変化してきたか。これは、さまざまな「知識の領域」の間でどのように比較・対比できるか。

この課題文へのアプローチについての論評

志願者は、「特権を有する」とは何を意味するかを考える必要があります。この概念は、特定の「知識の領域」における特定の「知るための方法」を検討したり、「知るための方法」の相互作用や「知識の領域」の組み合わせを検討したりすることによってとらえることができます。「特権」という概念は、これらに関する分析をどのように構成するかによって、やや異なる意味をもつ可能性があります。この課題文は、知識をもつことにより特権がどの程度生じるかを評価するよう求めています。特権がそれ自体として善か悪かは副次的な問題ですが、とはいえ関連性の高い問題です。

志願者は、この課題文の主張について考える際に検討され得るさまざまな種類の知識について考察することができます。事実に基づく知識が主な考察対象になるかもしれませんが、手続き的知識（いわゆるノウハウ）が特権をもたらすという考えを取り上げることもできます。

知識が特権を生むという考え方を支持するような一般的な論点は多数あります。きわめて現実的なレベルで言えば、教育を重視している人が世界中にこれだけたくさんいるという事実が、知識はそれを得る者に重要

な利をもたらすということを示唆しています。専門学識者のコミュニティは、その分野の高度な知識を有しているという理解から生じる高いステータスを常に謳歌してきました。また、特定の学問領域に携わる人々に与えられるステータスは、これまでの歴史の中で高くなることもあれば下降することもありました。現在は特権の非専門化が進みつつあるようですが、それを可能にしているのが、専門家でない人々も特定分野の公のディスカッションに参加できる新しいコミュニケーション手段（オンラインの専門誌や新聞の記事の下にコメントを書き込める機能など）の発達です。より大きなレベルでは、知識の蓄積の結果、人類全体が地上の他の生物（および地球そのもの）に比べてきわめて特権的なステータスに達していると論じることができます。これはおそらく、私たちの種が達成した代表的な功績でしょう。

一方で、特権とは、知識を所有しているかしていないかに関係なく獲得・保持し得るものだと論じることができます。無知であり教養のない人々が不相応な影響力を世界に及ぼす例は、数多く存在しています。また、素人にとっては、専門知識の大半は、難解で、明らかな実践的用途が存在しないもののように見えることでしょう。能力主義の考え方を奨励する努力が行われているにもかかわらず、社会は幾重にも階級化しており、これは今後ずっと続いていくように見えます。このような状態は、利己的關係という観点から説明できるかもしれませんが。そしてこういった説明もまた、知ることのできる者からはある種の「知識」と見なされ、したがって課題文の主張を裏づけることとなります。

志願者は、この課題文において、「特権」という言葉が、肯定的な意味合いと否定的な意味合いのどちらももつことなく使用されていることに着目するかもしれません。その場合、志願者はこの2つの意味合いを軸にしてこの小論文（エッセイ）を構成するアプローチをとるかもしれません。例えば、ある領域の知識は悪い意味での「特権」というイメージにつながることもある一方で、その逆、つまり、ある種の知識が良い意味での「特権」というイメージにつながることもあると論じることができます。また、このアプローチをとるのであれば、志願者はさらに、特定の「知識の領域」には肯定的な意味合いと否定的な意味合いの両方を併せもつ特権があるという議論を試みるかもしれません。これは、異なる「知識の領域」の比較にもつながります。この考え方を進めていくと、知識をもつこと自体が特権をもたらすのではなく、知識は使われて初めて重要性をもつという結論に帰着するかもしれません。また、この「知識の所有」と「知識の使用」の間の区別は、分析の出発点になるかもしれません。

所有を通じてであれ使用を通じてであれ、知識が特権をもたらすのであれば、これに伴って「知る人」（knower）の倫理的責任も生じることでしょう。また、知識にはじめから倫理的責任が伴うのであれば、これが特権を生じさせる理由となります。このように、志願者は、権力としての知識、または保有する者に力を与えるものとしての知識という考え方をとり上げ、論評することができます。ここでは、文化的に異なる見方も検討できるかもしれません。

また別のアプローチとしては、知識が特権をもたらすという仮説から始めて、この特権が知識の性質および知識の使用方法をどのように変化させるかを探究することもできます。ここでもやはり、「知識の領域」や「知るための方法」、またはその両方に着目することができます。この結果、志願者は、「個人的な知識」と「共有された知識」の概念に言及し、特権がその両方にどう影響するかを取り上げるかもしれません。また、この2つを区別する要因として特権がどのように機能するかを探究する可能性もあります。

さらに、知識の信頼性に関する問いに結びつけて分析を行うこともできます。知識が特権をもたらす、結果として権力をもたらすのであれば、そうした知識を生成する者は、知識の信頼性に対して十分な注意を払わない可能性があります。知識と力の関係ゆえに信頼性が高まるという反論も、展開することができるかもしれません。また、志願者は知識が時間の経過とともに変化することに言及し、この変化のプロセスが特権によって影響される、もしくはその変化自体が特権に影響を及ぼす可能性があることを論じることができます。

6. さまざまな「知るための方法」は、誤った思い込みをどの程度防止しますか。少なくとも1つの「知識の領域」に言及しながら、自身の解答の正当性を論証しなさい。

この課題文のポイント

この課題文では、「知るための方法」を少なくとも1つの「知識の領域」にあてはめて論じることが求められます。「知るための方法」の数は指定されていませんが、「さまざまな」とあることから、複数をとり上げるのが適切だと示唆されていることがわかります。「知識の領域」は、1つを選択することもできれば、複数を選択することもでき、これは小論文（エッセイ）の全体的な構成によって左右されます。この課題文に対する分析の基盤を確立するためには、「誤った思い込み」が意味し得るものがある程度詳しく読み解くことが必要になるでしょう。

知識に関する問い

この課題文に解答する過程で志願者が特定する可能性のある「知識に関する問い」には、以下のようなものがあります。

- さまざまな「知るための方法」によって、私たちはどの程度、誤った思い込みを防止できるか。その程度は、「知識の領域」によってどのように異なるか。
- さまざまな「知るための方法」は、どの程度、またどのように、誤った思い込みを防止するか。
- 自分自身で誤った思い込みをすることと、他人に誤った思い込みを抱かせることの間には違いがあるか。「知るための方法」は、その違いを区別するのにどのように役立つか。
- 他の領域に比べ、私たちが誤った思い込みを抱きやすい「知識の領域」はあるか。「知るための方法」はどのような役割を果たしているか。
- 誤った思い込みは、私たちが得る知識をどの程度変化させるか。このことは、知識の信頼性に対してどのような意味をもつか。
- 「知るための方法」によって誤った思い込みを防止できるのであれば、なぜそもそも私たちは誤った思い込みをしてしまうのか。
- 誤った思い込みをすることが肯定的にとらえられる状況は存在するか。
- 「知るための方法」は、どの程度誤った思い込みを引き起こしてきたか。さまざまな「知識の領域」における方法論は、この問題への対策としてどの程度機能してきたか。

この課題文へのアプローチについての論評

この課題文は、「知るための方法」を「知識の領域」と組み合わせて論じる必要があることを示唆しています。そして志願者は、それら間のつながりをどのように確立するかを決めなければなりません。特定の「知るための方法」を通じて小論文（エッセイ）を構成し、それらを「知識の領域」に適用していく際にとることのできるアプローチはいくつもあります。同様に、特定の「知識の領域」から構成が浮かび上がってくることもあり、この場合は、それらに関連した「知るための方法」を検討することになります。志願者は、この問いの文脈において「誤った思い込み」とは何を意味するかを検討する必要があります。自分自身で誤った思い込みをすることと、他人に誤った思い込みを抱かせることには違いがあるかもしれません。この課題においては、前者に重点を置くようにしなければなりません。

また、「誤った思い込み」は常に良くないことなのか、それとも「誤った思い込み」が望ましい、あるいは必要とすらされる状況があるかどうかとも検討できます。私たちが使用している「知るための方法」は、冷静に真理を探究するためというよりは、私たちが生き残るために進化してきた可能性があります。このため、ある種の知識の探究においては欠陥のある道具なのかもしれません。さらに、「知るための方法」が誤った思い込みを防ぐものであるならば、そもそもなぜ私たちは誤った思い込みをするのかという疑問もあります。

この課題では、「個人的な知識」と「共有された知識」の形成において「知るための方法」が果たす役割を検討することもできます。例えば、「共有された知識」という考えに内在する（言語という「知るための方法」を介した）人と人との対話は誤った思い込みの防止策となり得ますが、これは「個人的な知識」にはない特性です。一方で、「個人的な知識」ならではの独立性が、集団の思い込みから乖離するのに役立つ可能性もあります。どちらにしても、「知るための方法」がこの2種の知識の信頼性に寄与するという点は、深く踏み込んで考察してみる価値があります。

志願者は、最も説得力のある議論につながるような「知るための方法」を選択すべきです。例えば、知覚の使用は知識に対する実証的アプローチの基礎となり、過去の歴史においても、学者風の権威主義的な態度を覆す力となってきました。この意味で、主要な「知るための方法」として知覚を重視することが、科学の世界で誤った思い込みを解消する大きな要因であると考えられるかもしれません。土地に固有の知識体系に見られる経験的知識の事例も、知覚がもたらすプラスの影響を論じるうえで役立つ可能性があります。また、理論の大きな強みは、「知識に関する主張」をコントロールして真実を保護できる力にあると論じることができます。言語、特に書き言葉は、記憶の短所を補うことができます。しかし同時に、記憶がまったく存在しなければ、きわめて深い思い込みの奈落へと私たちは陥ってしまうでしょう。さらに、心理学の最近の研究成果では、すばやい直観から引き出された判断のほうが、理論を通じて到達した結論よりも信頼性が高い可能性があるという示唆されています。さらに、「判断の保留」として解釈される信仰は、個人を宗教活動へと導く際に重要な役割を果たしており、宗教への参加の結果として人々は洞察を得ることができます。「知るための方法」に関するこのような観察を特定の「知識の領域」に結びつけていくと、「知るための方法」は方法論の創造や使用に寄与するため、その結果として誤った思い込みを防止すると議論できるようになります。

一方で、「知るための方法」は一般に誤った思い込みを防止するものではないという主張を擁護することもできます。上述のように、「知るための方法」は、冷静に真理を探究するためというよりは、私たちが生き残るために進化してきた可能性があるからです。実際、「知るための方法」は、私たちが抱く誤った思い込みの原因である可能性があります。例えば、あらかじめ抱いている期待によって知覚が大きく影響されることは、すでに証明されています。また、理論を通じて到達した結論は、当初から提示された命題と比べて必ずしも高い信頼性をもつわけではありません。ただし、理論を慎重に適用した結果として、直観とは反対の正しい結論に到達することも少なくありません。感情という「知るための方法」は、多くの場合、客観的な知識の探究を妨げると考えられています。さらに、信仰によってだまされやすさが助長され、権威に対して疑問を抱かず受け入れる態度が生まれると主張する人もいます。「知るための方法」に内在するとされるこれらの欠点を考えるのであれば、「知識の領域」の方法論は、私たちが本来もっている惑わされやすい性質に知識の習得が翻弄されるべきではないという認識に基づいて開発されてきたと主張することもできるでしょう。